

パラナ日伯商工会議所 30 周年記念式典セミナー原稿

テーマ “日伯経済のビジネス展望”

<PAGE1>

1 はじめに

ブラジル三井住友銀行の窪田でございます。パラナ日伯商工会議所の皆様、創立 30 周年誠におめでとうございます。本日の 30 周年が移民百周年を迎えたこの節目の年に、またブラジルという国自身が未来を担う資源大国として世界から注目を浴びているという、これ以上にならない最高のタイミングで、お祝いが出来ますことを大変うれしく思っております。

<PAGE2>

2 増加する日本企業のブラジル進出～3つのキーワード

さて移民 100 周年の今年、日本企業のブラジル進出は大変な勢いで増加しており、また大型投資の話も多く、大いに弾みがついてきております。最近の日本企業のブラジル進出は大きく分けて次の三つのキーワードに集約されるように思います。①が資源（鉱業、農業、エネルギー） ②が自動車・オートバイ ③が個人消費関連であります。

<PAGE3>

①の資源に関しましては、鉄鋼メーカーの新日鉄がウジミナスと組んで向こう 4 年間で 141 億ドルという巨額の投資を予定しています。また住友金属もフランス・バローレック社との JV で 2000 億円をかけてシームレスパイプの工場を建設中です。

三井物産は 2003 年に資源最大手のバーレ社（リオドセ）に 971 億円を投じ、大きな成功を収めました。今年新たに 750 億円の増資を予定しています。また農業部門においても食糧資源の日本向け確保の観点から、昨年 8 月大豆のマルチグレイン社への出資を決め、これまでに 100 億円の資金を投入しています。

②の自動車・オートバイ関連ではトヨタ、ホンダの生産能力の増強を背景に、関連サプライヤーの新規投資、新規進出案件が目白押しです。7月15日にはトヨタがサンパウロ州ソロカバ市に10億ドルをかけて第二工場を建設する旨発表しました。

③の個人消費関連ですが、ブラジルでは2年間で2千万人も中産階級が増加し、全体の半数近くを占める様になるなど、個人消費の拡大は目ざましいものがあります。テレビ、デジタルカメラをはじめ、今様々な業種の日本企業がブラジル進出をもくろんでおります。

<PAGE4>

このように、日本企業のブラジル進出ラッシュが起こっているのは、日本の企業のブラジルに対する見方がここ数年で大きく変わり、ブラジル投資に対する安心感が大いに増してきているからです。

私も、ブラジルは実質GDPこそ、Bricsの3カ国に比べますと未だ見劣りしてますが、最近では政治と経済の安定度では3カ国に勝り、資源保有が重要視されるこれからの世の中においては、GDP成長率においても、むしろブラジルが成長の潜在性、持続性、安定性では一番になるのではないかとみています。

<PAGE5>

3 ブラジル経済を安定させる4つのファクター

それでは今のブラジル経済を安定させているファクターは何なのでしょう。

まずは製造業の成長がコモディティ価格の下落によるインパクトを支えるだけの十分なクッションになりつつあるということです。ブラジルからの主要輸出産品は鉄鉱石、大豆といった一次産品と思いがちですが、昨年は航空機、乗用車、自動車部品といった工業製品が、約70%となっております。コモディティ価格の下落が、ブラジル経済に与える影響は徐々に小さくなっております。

2番目には対米国一辺倒であった昔と違って、対米国依存度が極めて小さくなっており、貿易相手国の多様化が進んだという事実です。2007年のブラジルの対米輸出依存度は僅か15%です。もうアメリカが咳きをする、ブラジルが風邪をひく時代は終わったのです。

3番目には相次ぐ大油田の発見により、資源大国ブラジルのイメージを完全に世界に印象付けることに成功したということです。ブラジルが石油輸出国に転じることが出来る様になりますと、売り上げ代金が、ドルやユーロで入ってくる訳ですから、市場における外貨交換リスクは下がり、カントリーリスクは低下し、経済はより安定するわけです。

最後は、皆さんの国は、国際金融市場から信認されている中央銀行を持っておられるということです。ブラジルの長い歴史において、ここまでインフレの抑制に真剣に取り組、大きな成果をあげた中央銀行と中央銀行総裁はおりません。ハイパーインフレという過去のトラウマを払拭することを第一とするブラジル中央銀行の取組姿勢は、国際金融界から高い評価を得ております。

<PAGE6>

4 新たな時代に向かう日伯経済関係

さてこういった状況下、日伯関係は今まさに新たな時代を迎えようとしています。

先ずは今年両国の貿易関係にとって今までにない新たな動きが出てきました。ひとつはエンブラエルです。エンブラエル社がリージョナルジェット機10機をJALに納入することで、初めて日本市場に参入します。

ブラジルの輸出全体の70%がもはや工業製品であるのに対して、対日輸出は依然70%が資源です。今回のJALのエンブラエル機購入は、日本がブラジルの工業製品輸入を増加させる口火となることが期待されます。

もうひとつがペトロブラスによる沖縄にある南西石油の買収です。同社は追加投資による設備の高度化により、ブラジル産重質油の精製を計画し、日本のみならず中国、アジア諸国に幅広く販売しようとしています。

このブラジルを代表する大手2社の象徴的とも言える日本進出は、日本におけるブラジルの固定的なイメージを改めさせて、現在のブラジルが持っている新しい面、或いは多面性をしっかりと植え付けるきっかけとなって欲しいと思います。

二つ目は両国は将来十分に相互補完しあえる関係にあるということが分かってきたことです。

これから天然資源をどうやって安定的に確保していくのか、代替エネルギーは一体どうするのか、食糧に対する不安をどの様に解消していくのか、といった今の日本が抱えている大きな問題にブラジルはこたえてくれる数少ない国です。

一方でブラジルが世界の一流国の仲間入りをする際に、クリアしていかなければならない課題、インフラの整備、ビジネス環境への取り組み、教育の向上などは、日本はしっかりとした技術とノウハウをもっています。地上波デジタルTVの日本方式採用やリオサンパウロ間の新幹線技術なんかまさにそうです。

<PAGE7>

以前より結びつきが希薄になっていた日本とブラジルのビジネス関係が、こうした両国の相互補完ニーズを通じて、この移民100周年を迎えた2008年あたりを契機に、再構築されようとしていると言ったら言い過ぎでしょうか。それは、両国間の経済会議における抽象的な議論ではなく、今、両国の産業界で具体的なビジネス活動を通して、少しずつ形になりつつあるのです。

日本の多くの企業にとっては、ブラジルは未開拓なマーケットです。世界一二の生産を誇るトヨタも、ブラジルでは4%弱のマーケットシェアしかないので。今、日本の経済界と多くの企業が、ブラジルの安定性に着目し、高い成長性に期待を寄せて、ポテンシャルのある有望市場に進出しはじめたのです。

そして一方でブラジルも従来の国内重視から、国外に目を向け始め、大手企業のグローバル戦略の中で、アジアへの窓口としての日本の重要性を認識し始めました。

日系移民 100 周年の 2008 年は、日本とブラジルのビジネス関係においても、新たな時代の幕開けを予感させる年であります。私達は、かつてないほどの恵まれた、希望に溢れた、最高のビジネス環境を今迎えつつあるのです。

そしてこの素晴らしい流れを更にしっかりと後押ししてくれそうなのが、日伯の人的つながりの強さです。他国には例をみないこの人的つながりの強さは極めて貴重です。今ここにおられる日系人の皆さんが 100 年間にわたって、ブラジルで培ってこられた人脈、信用、信頼関係という財産がこの地にあります。

ブラジル人の多くの方々の心の中にも、大なり小なり日本人に対する親しみがああり、ビジネス界においても、抵抗なく日本人の考えに耳を傾けてくれる土壌がこの国にはあります。こうした他の Brics 諸国より遥かに強い人的つながりが今後も大きな力となり支えとなるはずで

<PAGE8>

5 最後に

最後に、ここにおられる皆様に申し上げたいのは、ブラジルと日本の新たなビジネス関係を考えるときに、ここパラナ州は、大変魅力のある州だということです。

パラナ州は自然と気候に恵まれた食糧資源の宝庫です。産業も盛んで、クリチバ周辺には大手自動車産業が進出し、一大工業地帯を形成しています。環境問題にも関心を示しおられ、私どもブラジル三井住友銀行が日本に最初に紹介した排出権の多くはここパラナ州からのプロジェクトからでした。そして人的にも、ブラジルで2番目の日系社会がパラナ州にはあり、日本との関わりが深い州であります。

今日、世界の未来を担う大国としてブラジルが世界の注目を浴び、国際経済の中で大いに存在感を増している中、日本でもにわかにはブラジルとのビジネス関係が再認識され、新たな補完関係を目指して関係が再構築されつつあります。是非、日本と関係が深いパラナ州が、両国の発展のために過去重要な役回りを果たしてこられた様に、次の時代も新しい両国の経済交流、協力のために、様々な分野での新たな取組をされていかれることを期待して、簡単ではございますが、私のスピーチとさせていただきます。

ご清聴有難うございました。M u i t o O b r i g a d o .